

## 学 位 論 文 要 旨

研究題目

Colorectal cancer treated by resection and extended lymphadenectomy:  
patterns of spread in left- and right-sided tumours

(大腸癌根治切除例における原発部位によるリンパ節進展形式の違いの検討)

消化器外科学 (指導教授又は研究科紹介教授 池内浩基)

氏 名 片岡幸三

【背景】大腸癌では原発部位によって予後が異なることが近年明らかになったが、原発部位によってリンパ節転移パターンがどのように異なるかは未だ明らかではない。今回全国登録データベースを用いて、リンパ節進展形式が予後に及ぼす影響が原発部位によってどのように異なるかの検討を行った。

【方法】大腸癌研究会の1999年から2007年までのデータを使用し、D3郭清を実施されたpStage III結腸癌を原発部位によって右側と左側の2つの集団に分類し、さらに結腸癌のD1郭清領域にリンパ節転移をみとめる群をL1、D2郭清領域に転移をみとめる群をL2、D3郭清領域に転移をみとめる群をL3と定義した。L1からL2、L2からL3へと順番にリンパ節転移がみられるパターンをSequential pattern、L1からL3または、L2のみの転移など、飛び飛びにリンパ節転移がみられるパターンをSkip patternと定義した。無再発生存期間および全生存期間はKaplan-Meier法を用いて推定し、原発部位ごとのL群およびリンパ節転移パターンと生存期間との関連はCOX比例ハザードモデルを使用して推定した。

【結果】D3リンパ節郭清を伴う結腸切除を実施した病理学的Stage IIIの結腸癌4034例(右側1618例、左側2416例)が解析対象となった。解析対象全体の5年全生存期間は右側が左側と比較して短い傾向にあったが(右側/左側77.4/80.9% hazard ratio 1.23(95%CI;1.08-1.40), P=0.002)、無再発生存期間はほぼ同じ傾向にあった(69.9/70.7%)。右側では左側と比較して主リンパ転移(L3群)の頻度が多かった(8.5/3.7%; P<0.001)。リンパ節進展形式に関してはskip patternが右側において左側より多くみられた(13.7 versus 9.0%; P<0.001)。多変量解析では主リンパ節転移陽性は左側結腸癌において全生存期間の予後不良因子であったが(HR2.41(95%CI;1.67-3.47), P<0.001)、右側ではその傾向はみられなかった(HR 1.32(95%CI;0.89-1.96), P=0.174)。またSequential patternは左側結腸癌において再発の予後因子であったが(HR 1.46(95%CI;1.09-1.97), P=0.011)、右側ではそのような傾向はみられなかったHR 1.16(95%;0.84-1.60), P=0.373)

【結語】

原発部位によってリンパ節の進展パターンは大きく異なることが示唆された。原発部位に応じた、手術化学療法の集学的治療戦略が必要である可能性が示唆された。